

21_21 DESIGN SIGHT 企画展 「田中一光とデザインの前後左右」

21_21 DESIGN SIGHTでは、9月21日より、企画展「田中一光とデザインの前後左右」を開催します。

日本を代表するグラフィックデザイナー 田中一光(1930~2002)は、伝統の継承から未来の洞察、東と西の国々との交流など、田中自身の言う「デザインの前後左右」を見すえたアートディレクターでもありました。琳派、浮世絵、伝統芸能など、市民の文化を熟知し、それらを視覚表現の主題として現代の創作に活写した田中の影響は、同時代のデザイナー、企業人、社会に広がっていきました。また、グラフィックのみならず、出版・編集デザイン、ギャラリー空間での発表、商品などへの企画提案、そして茶道への眼差しを含めた仕事の成果は、現在の社会に定着するものとなっています。

本展では、田中一光の著書『デザインの前後左右』に根ざし、その発想の広がりや表現の着地するさまを多彩にとりあげます。残された膨大な数の作品や資料を検証し、田中を日本独自の視覚表現の推進者と位置づけ、仕事の主軸となるグラフィックデザイン作品を中心に、映像や図版、記録資料など、活動の実際を示す貴重なアーカイブも紹介します。それらを通して、田中一光というクリエイターの人と仕事に迫り、デザイン思想がどのように展開し、表現されたかを探ります。

戦後からの激しい時代を伸びやかに生き抜いた田中一光の創作の軌跡をたどる本展は、現代社会へのメッセージに満ち、これからのクリエイションの新しい方向性と可能性を示唆するものとなるでしょう。

会期 **2012年9月21日(金)~2013年1月20日(日)**

休館日 火曜日(10月30日、12月25日は開館)、年末年始(12月27日~1月3日)

開館時間 11:00~20:00(入場は19:30まで)

入場料 一般1,000円、大学生800円、中高生500円、小学生以下無料

会場 **21_21 DESIGN SIGHT** (東京ミッドタウン・ガーデン内)

〒107-0052 東京都港区赤坂 9-7-6 TEL.03-3475-2121 www.2121designsight.jp

主催 21_21 DESIGN SIGHT、公益財団法人 三宅一生デザイン文化財団

後援 文化庁、経済産業省、港区、社団法人 日本グラフィックデザイナー協会、東京アートディレクターズクラブ、東京イラストレーターズ・ソサエティ、東京タイプディレクターズクラブ

助成 公益財団法人 花王芸術・科学財団

特別協賛 三井不動産株式会社

協賛 株式会社 良品計画、西武・そごう、特種東海製紙株式会社、株式会社モリサワ

特別協力 財団法人 DNP文化振興財団、大日本印刷株式会社

協力 株式会社 竹尾、エルコ ライティング 株式会社、キヤノンマーケティングジャパン株式会社、凸版株式会社、FRAMED*、株式会社 中川ケミカル、マックスレイ株式会社、株式会社 ロフト(順不同)

展覧会ディレクター:小池一子

会場構成・グラフィックデザイン:廣村正彰

参加作家:Semitransparent Design、三宅一生+Reality Lab.

照明デザイン:海藤春樹+武石正宣 / 深沢 明 / 甲斐淳一

設計協力:中村デザイン事務所

企画協力:太田徹也

21_21 DESIGN SIGHT ディレクター:三宅一生、佐藤 卓、深澤直人

同アソシエイトディレクター:川上典李子



02. 田中一光 撮影: 石元泰博

「傷ついた地球の再生を考えるデザイン、非西欧文明の再認識、コンチネンタル・スタイルからの脱出、快適追求の後退、きれい事でない国際交流、地球人認識から発生するさまざまな思想の衝突、新品のツルツル、ピカピカではない美意識の復興。それらが二十一世紀デザインの最大の課題ではないかと思う」

「地球資源の枯渇、環境汚染、交通・都市の問題、産業や生活の廃棄物、さらに福祉や高齢化社会問題など、いままで豊かな生活だけを追い求めたデザインに、いくつもの課題が山積してきた。デザインがこうした時代におせっかいな概念にならないよう、注意しなければならない。人間にとってもデザインにとっても、受難な時期がきたようである」

(出典:田中一光著『デザインの前後左右』白水社、1995年)

たなか いっこう
田中一光／グラフィックデザイナー

1930～2002年。奈良市生まれ。京都市立美術専門学校(現・京都市立芸術大学)卒業。鐘淵紡績、産経新聞を経て、57年上京。ライトパブリシティに入社。60年、日本デザインセンター創立に参加。63年、田中一光デザイン室を主宰。日本万国博覧会政府館の展示設計や、札幌冬季オリンピック大会、ロンドン「ジャパニスタイル」等の企画、展示設計など多方面の分野で国際的に活躍し、73年より西武流通グループ(現・セゾングループ)のアートディレクターとして活躍。店舗空間、環境デザイン、CI 計画、グラフィック、「無印良品」のアートディレクションなどを通して、企業イメージ戦略をデザイン面から総合的に支えた。他に、「ギャラリー・間」(TOTO)、ギンザ・グラフィック・ギャラリー(DNP文化振興財団)などの運営に尽力し、企業の文化推進への功績は大きい。また、裏千家・前家元千玄室次男、故伊住政和氏の主宰する「茶美会」の企画監修、アートディレクションをつとめるなど、日本の伝統文化である「茶の湯」の現在のあり方を模索し、茶人「宗一」としても多くのクリエイターに多大な影響を与え「現代の茶の湯」を広めた。

88年パリ装飾美術館所属広告美術館、95年メキシコ現代アートセンター、97年ミラノ市近代美術館、2000年ベルリン・バウハウスアーカイブミュージアムなど、国内外で多数の個展を開催した。88年毎日芸術賞、94年紫綬褒章、ニューヨークアートディレクターズクラブ殿堂入り、1998年朝日賞、98年東京 ADC グランプリ、00年文化功労者表彰など受賞、受章多数。主著に『田中一光のデザインの世界』(講談社)『デザインの周辺』、『デザインの前後左右』、『デザインの仕事机から』(白水社)などがある。作品はニューヨーク近代美術館をはじめ内外多数の美術館に収蔵されている。

■ メッセージ

田中一光さんが他界されて今年で10年になります。この間、日本の社会は東日本大震災を筆頭に大きな試練の時代を迎えています。このような時に「田中さんだったらどのような示唆や発言をされるか」と考えさせられます。この展覧会は、デザイナーとして社会、文化、生活の望ましい姿を思い描き創作に向かった「田中一光の仕事」を今こそしっかりと見たいという願望から生まれました。田中一光さんは、自分の存在を時間軸の経線と東西を示唆する横線の接点に位置すると考え、十字路に立つという意味で「デザインのクロスロード」というタイトルの個展を開かれたことがあります。また展の“デザインの前後左右”という表現も、デザインするという行為が社会や歴史のさまざまな局面を巻きこむこと、決して机上の作業や自己表出のみにあるのではないということを示唆していると思います。とはいえ田中さんのアーカイブをひもとく時間を与えられた者としては、展示したい作品の多さ、細やかな仕事とその背景をどのようにお伝えすればいいかという悩みを抱えています。敬愛するディレクターの軌跡をたどる者として、また同時代の仕事仲間として、正確かつ深い洞察に基づき展覧会に仕上げたいと願っています。

小池一子(本展ディレクター)



03. 小池一子
撮影: 高木由利子

こいけかずこ 小池一子 / クリエイティブディレクター

東京生まれ。早稲田大学文学部卒業。「無印良品」創業以来アドバイザー・ボード。武蔵野美術大学名誉教授。1983年~2000年日本初のオルタナティブ・スペース「佐賀町エキジビット・スペース」創設・主宰。現代美術の新しい才能を国内外に送り出した。00年、ヴェニス・ビエンナーレ第7回国際建築展 日本館「少女都市」企画・展示監修。04~05年武蔵野美術大学 美術資料図書館、及び鹿児島県霧島アートの森「衣服の領域 On Conceptual Clothing: 概念としての衣服」展、09年BankART Studio NYK(横浜)「INTERVALLO 幕間展 アート/ファッション/デザインのまくあいで」その他、公私立の美術館への企画参加も多い。11年より「佐賀町アーカイブ」として、佐賀町エキジビット・スペースの活動と資料、作品コレクションを検証し、展示し、語り、学ぶ、アーカイブをショーケース化するという新しい試みに着手。編著書に『三宅一生の発想と展開』(平凡社、78年)、『空間のアウラ』(白水社、93年)、『Fashion—多面体としてのファッション』(武蔵野美術大学出版局、04年)など。主な受賞は85年度毎日デザイン賞、95年度日本文化芸術振興賞。

私は1977年から1988年までの11年間、田中一光デザイン室に在籍していました。田中先生も47歳から58歳と増々脂が乗ってきた時期であり、年々デザインの領域が広がり、制作量も毎年増え続けていた頃でした。今回この展覧会のために全体の資料と作品を見直してみると、改めて質の高さと多作さに驚きました。そして田中一光のデザインの軌跡が日本のデザインの流れとほぼ同期していることに、時代との宿命を感じました。創成から活性、そして成熟期と、その時代を象徴する仕事と出会い、その仕事の充実が次の時代のステップになっていく。そんな展開がいつも簡単そうに、自然な成り行きのように進んでいったことに、意志の強さとブレない選択眼を観ることができます。また料理や茶事、音楽や演劇など趣味を越えた興味が仕事のボーダーを無くし、新しいデザインの創造へと繋がってゆく面白さを感じます。展覧会では作品と合わせ、制作過程での思考や思索のプロセスを観ることで、時代を経ても輝き続ける田中一光のデザインの魅力を少しでも解明出来ればと思います。

廣村正彰(本展会場構成・グラフィックデザイン)



ひろむらまさあき
廣村正彰／アートディレクター

1954年愛知県生まれ。田中一光デザイン室を経て、88年廣村デザイン事務所設立。主な仕事に日本科学未来館CI／サイン計画、日産自動車デザインセンターサイン計画、奈良平城遷都1300年記念事業マーク、横須賀美術館VI／サイン計画、9hナインアワーズ京都寺町AD／サイン計画、西武池袋本店リニューアル計画、ロフト有楽町総合AD、すみだ水族館VI／サイン計画。西武ギャラリーにて「ジュングリン 意識が動く瞬間」開催。主な受賞に2008年毎日デザイン賞、KU/KAN賞、10年SDAサインデザイン大賞、グッドデザイン金賞ほか。

04. 廣村正彰

■ 展示構成と見どころ

[プロローグ]

現在も残る田中一光の立体作品を、実物と実物大の写真バナーで展示。

- ・「色彩流水-A」「色彩流水-B」 木製パネル 大日本印刷営業ビルロビー、1987年（実物展示）
- ・「紫のあやめ」「赤と白の椿」 壁画 成田国際空港、1992年（写真展示）

[ギャラリー1]

田中一光が装幀や構成を手がけた書籍と著書約60冊を、実物とともに一部の内容をデジタルデータで紹介。また、当時田中が自宅で資料として参照していた国内外のデザイン、アートに関する蔵書を展覧会のために選書し、約40冊を展示。

[ギャラリー2]

田中一光のグラフィック表現の広がりとお行きを以下のテーマに分け、完成品の縮刷とともに原画や校正紙など田中一光デザイン室の貴重なアーカイブを紹介。壁面ではオリジナルポスターやグラフィックアート（版画）約80点も展示。

(1) ヴィジュアル表現の発想と展開

- 「文字・タイポグラフィの追求」
- 「立ち上がる文様」
- 「日本の仕込人」

(2) ライフスタイルの基盤

- 「生活美学」
- 「場づくり」
- 「アートディレクションと企業」

(3) アートとともに

- 「パフォーマンス・アーツと」
- 「ミュージアム、グラフィックアート」
- 「墨戯」

[エピローグ]

- ・ 田中一光のデザイン思想の流れを汲み、インスピレーションを受けたデザイナーたちによる新作を展示。Semitransparent Designによるインタラクティブアート、三宅一生+Reality Lab.による衣服、田中がディレクションした150色の紙と100色のカットニングシートを使った廣村正彰によるインスタレーションを展示。
- ・ 「私の一光さん」 生前の田中一光を知る関係者から集めた貴重な写真群を紹介。

■ 関連プログラム

会期中は和田 誠、横尾忠則、千 宗屋、祖父江 慎、Semitransparent Design、三宅一生+Reality Lab. など、さまざまなクリエイター、文化人によるトークシリーズ「カンバセーション」や、高田 唯による活版印刷のワークショップのほか、ギャラリーツアーなどを開催予定。

■ 関連書籍

『田中一光とデザインの前後左右』 発売元:FOIL デザイン:廣村正彰 B5判 96ページ 9月中旬発売予定

■ プレス画像

(画像使用をご希望の方は広報担当までご連絡ください)



05. 「色彩流水-A」「色彩流水-B」 木製パネル
大日本印刷営業ビルロビー、1987年
撮影:吉村昌也



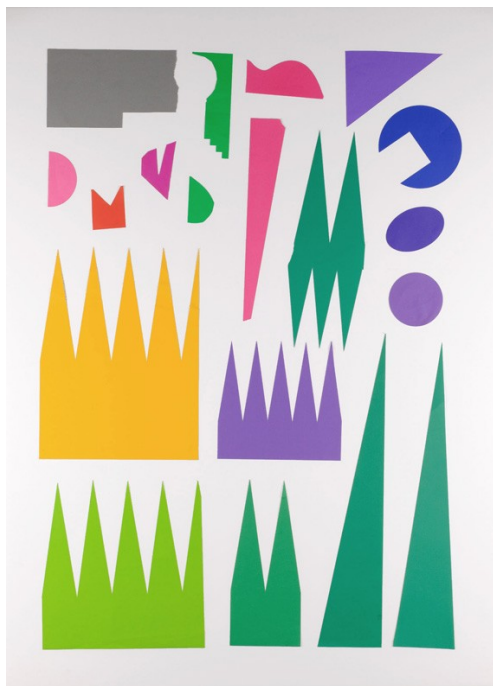
06. 展示予定の書籍より
撮影:吉村昌也



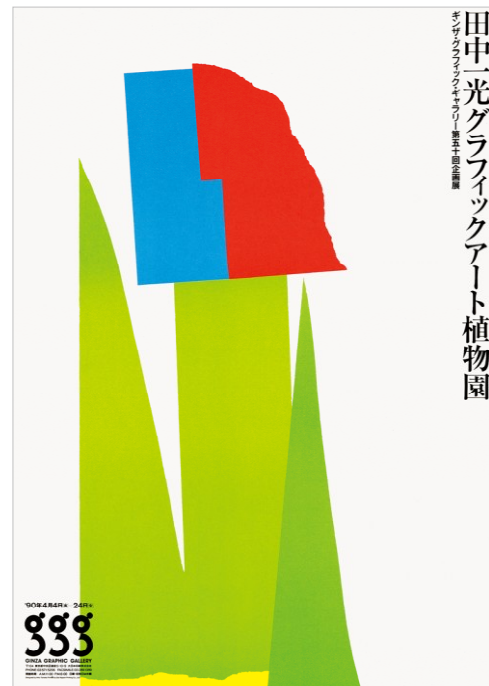
07. 「Music Today ['73]」 原画



08. 「Music Today ['73]」 ポスター
西武劇場(現・PARCO 劇場)、1973年



09. グラフィックアートの素材、切り紙



10. 「田中一光グラフィックアート植物園」ポスター
ギンザ・グラフィック・ギャラリー、1990年



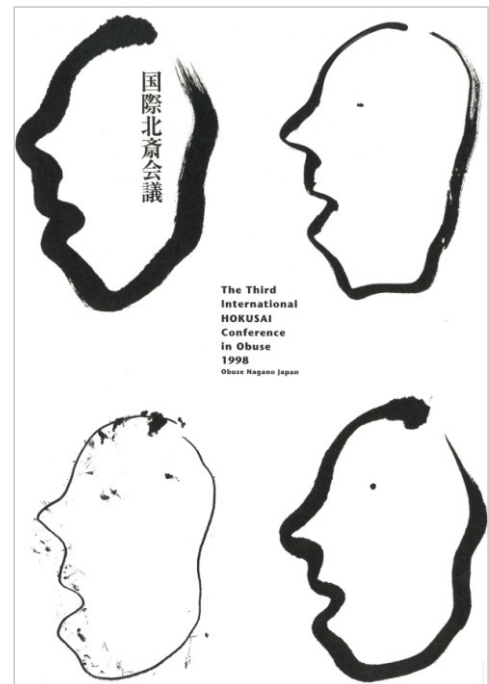
11. 「文字からのイメージネーション」 版下



12. 「文字からのイメージネーション」 ポスター
モリサワ、1993 年



13. 「第3回国際北斎会議 小布施」下絵



14. 「第3回国際北斎会議 小布施」 ポスター
第3回国際北斎会議小布施実行委員会、1998 年